

*転載・無断使用・二次配布等は固くお断りいたします

【ボイス】

おはなしの世界へ 作：くろねこチップス

一番

誰かの特別

素敵な言葉。憧れるよね

私もあなたの一番になりたいな・・・なんてね。

ねえ、これから始まるちょっと不思議な物語に耳を傾けてみない？

どんな世界が待っているのかな

【詩】

「おはなし」 作：くろねこチップス

これはね

とある人から聞いた おはなし

あるところに女の子がいました

女の子は 自分を必要としてくれる場所を探していました

学校？

おうち？

公園？

それとも森の中？

女の子は だれかの一番になりたいくて毎日泣いていました

「他のだれでもない わたしをいちばんだっていってくれる人がほしいの」

ある日、女の子はお山のとっぺんに座って 町であそぶ子どもたちをみていました

そこへ 一羽の小鳥がやってきました

小鳥さんは女の子の肩にとまっていました

「なんで そんなに いちばんになりたいの？」

女の子は答えます

「あの子も この子も だれかのいちばんになってるの わたしも いちばんになりたいの」

小鳥さんがいいます

「だれかのいちばんになるってたいへんなんだよ

すっごく すっごく たいへんなんだよ

おとなになっても おばあちゃんになっても だれのいちばんにもなれないか
もしれないよ

だからさ じぶんで じぶんの いちばんになりなよ

そうしたら ぼくみたいに じゅうになれるよ」

そうって小鳥さんは とんでいきました

これはね、とある人から 聞いた おはなし

ふしぎな ふしぎな おはなし

他にも まだまだ たくさんあるから また今度 おはなししてあげるね

【ボイス】

猫の街へ 作：柊ユーリ様

さあさ、耳を澄ませてごらんなさい。
どこかから、鈴の鳴る音が聞こえてきませんか？
それは小さくて、気紛れで、煮干しの大好きな猫が街を歩く合図なのです。

さあさ、耳を澄ませてごらんなさい。
どこかから、猫を呼ぶ人々の声が聞こえてきませんか？
それは優しく、猫が好きで、でもちょっと忙しい人たちが猫を招く合図なのです。

あなたならいったい、彼にどんな名前をつけますか？

【朗読】

「猫の散歩」 作：柊ユーリ様

ふわああ、とその猫はひとつ大きなあくびをしました。
塀の上をのんびりと歩いています。
お日様が顔を出したばかりなので、外は薄暗くて、まだまだ早い時間です。
けれど、それだけ外に出ている生き物は少ない時間なのです。

「やあ、おはよう、ラッキー！」

ラッキーと呼ばれた猫は、のっそりと気だるげに振り返りました。
そこでは魚屋のおじさんがひらひらと機嫌よさそうに手を振っています。
どうやら「いちば」というところで仕入れから帰ってきたばかりのようです。

「今日も一匹食べていくかい！」

にゃあ、と一声返事をすると、うんうん、とおじさんは満足げに何度も頷きました。

声の大きなおじさんです。
聞こえているのだから、もっと静かに喋ったらいいのに、と猫はいつも思っ

います。

でも、近寄っていくと大好きな魚を一匹投げってくれるので、すりすりとお頭をその足に擦りつけました。

「今日もたっくん魚が売れるように、お前も祈っておいておくれよ」

力の強い撫で方は、ちょっとだけ鬱陶しいです。

仕方なくもぐもぐと食べ終わると、ふいっと歩いてまた旅立ちました。

「こんにちは、ミミちゃん」

猫の隣にしゃがみ込んだ少女は、にっこりと微笑んで挨拶をしてきました。

ベンチの下で昼寝をしていたところだったので、猫は少し不機嫌そうにします。

少女はそんなことには気づかず、赤い大きなリュックをひょいとベンチの傍らに置きました。

「なでなでしてあげるよ、お膝においで」

けれど少女のなでなでは、温かくて優しく、とびきり気持ちがいいのです。

ベンチに座った少女の膝にひょいと飛び乗り、再びうずくまります。

えへへ、と笑う少女の声を聞きながら、猫はまた目を閉じました。

少女はいつまでも、そうして撫で続けていました。

「ミミちゃんの身体は、サラサラしていつも気持ちがいいねえ」

当然だろう、と猫は心の中で胸を張っていました。

「ただいま、タマ」

扉を開けてふらふらと入り込んできた女に、にゃあ、と猫はひとつ鳴きました。

女はそれを出迎えとばかりに喜んでいますが、違うのです。

猫は、女の帰りが遅いにご飯がないことを怒っているのです。

「君だけだよお、私のことをそんなふうに慕ってくれるのは」

思い上がられては困ります。

けれどご飯がなくては困るので、猫は仕方なくその足に頬を擦りつけました。
疲れ切った肩を下げて、女は重い身体を引きずるようにしてキッチンへと向かいます。

「そうだ、今日は私とタマが出会った記念日だったでしょう」

ポケットから女が取り出した包み。

思わず猫が前足を伸ばしてそれに触れようとすると、女はまてまてと笑って包みを開けてくれました。

「ほら、鈴の音がする首輪だよ。私のケータイ番号が書いたタグがついてる。これでなにかあっても大丈夫だ」

なにかあったらとは、いったいなんでしょう。

よくわかりませんでした。女のつけてくれた赤い鈴の首輪のことは、とっても気に入りました。

少し身体を動かすだけで、ちりりん、と鈴が涼しい音をたてます。

「よしよし、よく似合ってる」

そう言って笑う女はいつもひどく疲れていて、猫は首をかしげてしまいます。
仕事なんてやめて、猫になってしまったらいいのに。

そうしたら、好きな人間と好きなだけ触れ合うことができるのです。

そう、自分のように。

でも、女は猫を羨ましがってはいますが、なぜか猫になりたいわけではないようでした。

ふにゃあ、と甘える声をひとつだして、ご飯を食べた猫はまるくなって眠ります。

女の眠りかけた布団に潜り込んで、彼女の顔が嬉しそうに綻ぶのを見届けてから。

そして、明日は誰のところに会いに行こうかにゃあ、なんて、考えながら。

【ボイス】

夢の中へ 作：柊ユーリ様

さあさ、目を開いて御覧なさい。

猫が眠りの世界に旅立ちました。

さあさ、目を閉じて追いかけてみましょう。

猫の眠りの世界を、ちょっとだけ覗いてみたいでしょう？

さあさ、次におりなすは夢の世界。

腹ペコ猫のお腹は、ぐうぐう鳴っているみたいですよ。

【朗読】

「猫の夢」 作：柊ユーリ様

ぽうん。ぽうん。

猫が雲の上を歩いていくと、トランポリンのように身体は軽く飛び上がります。

猫は目をぱちぱちとしばたかせて、身体が跳ねるがままに身を任せています。ちょっとずつしか進むことはできませんが、それはそれは楽しいのです。

ぽーん、ぽーん……ととーん！

はずみで高いところに飛び上がった猫は、ピンク色をした雲の上に降り立ちました。

そのまま前へと進んでいくと、なんとたくさんのカリカリが猫のために置いてあります。

猫はそれが大好物なのです。

ぱくんと加えて、カリカリ、カリカリとそれをかじります。

そうしながら、あたりをじっくりと眺めまわしました。
ここには色とりどりの雲が浮かんでいて、いい匂いが漂ってきます。

あっ、あれは魚を焼く匂いでしょうか。
ヒクヒクと鼻を動かしてみながら一歩足を踏み出すと、またぽーん！と猫は飛び上がりました。
そして今度は、淡い緑色をした雲に降り立ちます。

あっ！ と驚いた猫の前に、さあ食べてくださいと言わんばかりの焼きたての魚が置いてあります。
明らかにあやしい、けれど辺りを観察するためにくんと匂いを嗅ごうとすると、
嫌でもその魚の美味しそうな匂いが届いてきてしまうのです。
じゅるり、と音をたてるほどに猫の口の中に唾がたまってしまう。

目をぎゅっとつむった猫は、思い切ってそのままパクッ！と魚に飛びつきました。
ああ、美味しい！
パキパキと骨をかみ砕きますが、不思議とちっともそれはいつものように頬を内側から刺して来たりしません。
じゅわっと脂の乗った身が口の中で広がって、猫をただただうっとりとした世界に誘うのです。

がぶがぶ、がぶがぶ、と猫は魚を堪能し、やがてお腹はいっぱいになりました。
けれど、どうしたことでしょう。
いつもよりずっとたくさん食べたはずなのに、猫はちっともお腹が苦しくならないのです。

次に何を食べよう。
そう思って見上げた猫の視線の先に、今度は黒い雲が漂っていました。
なんだか怖いなあ、と思いながら、ぽーん！ ともう慣れた足つきで飛び上がります。

けれど下りたつたすぐから、猫の顔はぱっと輝きました。
なんと、その黒い雲はチョコレートそのものだったのです。

ぺろぺろと舐めた先から、猫を心をじーんと満たしてくれるのです。
猫は、ほんとうは甘いものを感じることができない生き物です。
でも、夢の中のそれはとっても甘くて……猫は、ふにゃあ、と思わずご機嫌な
声を漏らしました。

ふうう。
猫はなんだか喉が乾いてきました。
そう思って見上げた先には、何故だか普通の白い雲。
なんだあ、と猫は肩を落としましたが、思い切ってぽーん！と飛び上がります。

その白い雲に降り立った途端、猫はつるんっ！と足を滑らせました。
ニャァ！と悲鳴をあげましたが、ひっくり返ってから気づきました。
おそるおそるうつぶせになって、ぺろりとそこを舐めてみます。

すると、思ったとおり！
そこはとても甘くて、冷たくて……そう、アイスクャンディで出来た雲だった
のです。
だから白かったのですね。
猫はそのまま機嫌よく、ぺろぺろ、しゃくしゃく、ぱきっ、とそれを舐めたり
かじったりし続けました。
たくさんたくさん舐めても、雲は大きいので、まだまだたくさん舐めることが
できそうです。

ふにゃあ。
でも、猫はだんだんそれにも飽きてきました。
頭の上では、様々な色の雲がいくつもいくつも、漂うようにゆっくりと流れて
いきます。
あそこには、どんな美味しいものが待っているのでしょうか。
けれど、白い雲はつるつると滑るので、猫は飛び上がることができないのです。

猫はとっても困りました。
なんとか飛び上がろうとうんと背を伸ばしてみますが、やっぱりすぐにぺた
んと身体が地面についてしまいます。
猫は美味しいものがもっともっと食べたいのです。
あの紫色や、緑の雲にはいったいどんな美味しいものが待っているのか、とて
も知りたかったのです。

けれど、猫はとうとう、身体ごとつるんとすべらせて、飛び上がるどころか身体は真っ逆さまにおちていきました。

ひゅうう～。

ひゅうう～……。

ごちん！ と床に頭をぶつけたところで猫は目覚めました。

むにゃむにゃ、と頭をこすったところで、今までのことが夢だったのだと知りました。

猫はむすっと顔を歪めて、もう一度同居人のベッドに潜り込みます。

ふわぁあとあくびをひとつして、そうして再び夢の中へ。

さて、猫はまた、同じ夢がみられるのでしょうか？

【詩】

「あなたへのプレゼント」 作：くろねこチップス

一生懸命選んだの、あなたのことを思い浮かべて
あなたの笑顔が見たいから

これならどう？

あれならどう？

って。

いっぱい悩んで考えたの

笑った顔がかわいくて

いつまでも見ていたくなるの

ずっとずーっと一緒にいたいなって

私、決めたの

プレゼントと一緒にこの気持ちを伝えるんだって

そう思ったら

胸はドキドキして
顔は赤くなって
耳まで赤くなって

このドキドキがあなたに伝わっちゃったらどうしよう？

返事をすぐに聞くのはやっぱり怖いから
後でこっそり教えてね

まっすぐ届け

あなたへのプレゼント

●シナリオ

くろねこチップス
「おはなしの世界へ」
『おはなし』
『あなたへのプレゼント』

柊ユーリ様
「猫の街へ」
『猫の散歩』
「夢の中へ」
『猫の夢』